

ONEOHTRIX POINT NEVER / R Plus Seven

ワンオートリックス・ポイント・ネヴァー『アール・プラス・セブン』

実験音楽〜現代音楽シーンで今最も熱い注目を集めるアーティスト、ワンオートリックス・ポイント・ネヴァー。
アンビエント、ミニマル、音響エレクトロニカ、そしてゼロ年代のドローンとシンセ・リバイバルが見事にクロスオーバー。
ソフィア・コッポラ最新作『THE BLING RING』(2013年12月公開予定)の音楽監督にも大抜擢!



ブルックリンを拠点に実験音楽〜現代音楽シーンで今最も熱い注目を集めるアーティスト、ダニエル・ロパティン。彼は、ワンオートリックス・ポイント・ネヴァー名義で様々なインディ・レーベルより数多くのアルバムをリリースする他、膨大な数のカセットによるミニ・アルバムのリリースを重ねてきた。2010年作品『Returnal』のタイトル・トラックをピアノ曲へと作り直した際にヴォーカリストとして招いたアントニー・ヘガティ(アントニー・アンド・ザ・ジョンソンス)や、現行アンビエント・シーンの最重要アーティスト、ティム・ヘッカーとコラボレーションするなど、ドローンにも現代音楽にも接近できる希有な音楽家として、その存在感を確かなものにしている。Pitchfork で 8.8 点を獲得し BEST NEW MUSIC にも選出された 2011 年作品『Replica』は特に評価が高く、テレビ CM の音からとったローファイ・オーディオの素材を使って制作されていることでも話題となった。さらに 2011 年にニューヨーク近代美術館で、ヴィジュアル・アーティストのネイト・ボイスとコラボレートしたマルチメディア・パフォーマンスを披露、2012 年のカンヌ映画祭でもインスタレーション・イベントに参加。またソフィア・コッポラの最新映画『The Bling Ring』(2013 年 12 月公開予定)のオリジナル・スコアを担当するなど、彼の活動範囲はとどまるところを知らない。

今作『R Plus Seven』には、この気鋭のアーティストの進化を追い掛けてきたリスナーにとっては馴染みのサウンドが数多く含まれている一方、過去の作品から大きな飛躍を果たしたものとなっている。彼の実験的な趣向は、一見身を潜めている一方、その音楽自体はこれまでの作品の中でも伝統的な曲構成に則ったものに最も接近している。だがそれは、ロパティンにとってあくまで“接近”したに過ぎない。この作品では、抽象音楽的脊柱やパズルのような断片が随所で折り重なっており、それらが一体となれば、聴き手は全編に広がる絵画的な描写を垣間見ることになるだろう。だが、それは目的地というよりも旅路というべきものだ。『R Plus Seven』は破壊的であり催眠的である。そして、その楽しみは彼の音楽に身を任せることだ。彼は次々と現れる壁や鏡の前に ----- 時にはその中に ----- 聴き手を導くのだ。

「このアルバムには多くの寓意がある」ロパティンは解説する。「時にそれらは配置や規模によって遠回しのヒントとなるんだ ----- 物の隔たり、あるいは考えの相違などのようにね。時にそれらは、聴き手に音楽スタイルの重要性を抽象概念を通して一考してもらうよう求めるんだ」

カバーアートは、見ての通りの、そして象徴的な意味においても『R Plus Seven』への“入り口”である。このイメージは、彼の長年のヴィジュアル・コラボレーター、ロバート・ピーティが、スイスの映画製作者／グラフィックデザイナー、ジョルジュ・シュヴィツゲベルの幻想的で奇妙な反復の感覚をもたらし短編アニメーション『フランケンシュタインの恍惚』(1982 年)から翻案したものだ。

コンセプトに関するレベルでは、前衛小説家ジョルジュ・ペレックの小説『人生使用法 (La Vie mode d'emploi)』に着想を得たことが、このアルバムのクリエイティヴな起点となった。ペレックはまた、ウリポ (Oulipo) (フランス語で「潜在的文学工房」を意味する言葉の頭字語) に参画し、創作技法として『制約 ----- 複雑な規則や方針 -----』を設けながら文章を書いていた。そうしたプロセス志向の詩は、ロパティンの語り手たち、すなわちシンセサイザー処理されたテキスト音声変換の声によって『R Plus Seven』に収められることとなった。これは、彼がネット上にあるインタラクティブ・フィクションのデータベースやカタログから集めたテキスト ----- 原稿、攻略ガイド、メニュリスト、取扱説明書、法的放棄声明文 ----- を混ぜ合わせ、それを読み上げるようプログラムしたものだ。それら全てがウリポのテクニクに則って再構築され、シンセ処理された声によって語られ、クロマチックの音階を施されたサンプリング音としてちりばめられている。

「それらがアルバムの中で何かを語り出す時、それはテキストの中から浮かび上がってきたある種の音楽的要点や疑問、主題などを示すシグナルとなるんだ。僕が考えていた音楽的テーマにテキストをどうやって対応させていくか、は完全に直感によるものだった。そういう意味では、このアルバムの“プロセス志向”の側面は、実際にはそれほど重要なものではない。それらはただ、『もの』を生み出す役割を果たしているだけなんだ。それらが僕に、音楽的に次のステップをどうするべきか、を示唆してくれるという点でね」

今作で彼は、トラックの大部分はソフトウェア・シンセサイザーで制作、そしてエンジニアのポール・コーリーとアナログミキサーでミックス・ダウンを行なった。印象的なエフェクトを生み出すために使用したデジタル機材の大部分では、CM や TV/ 映画の BGM の制作のために開発されたソフトウェアを使用している。アルバムは、大聖堂にあるようなオルガンの物々しいリフで幕を開け、アルバムが進むにつれて、より高揚感に溢れる神々しいまでの合唱に取って代わられる。そうやって『R Plus Seven』は聴き手を捻くれた語法の迷宮へと誘い込んでいく。

その聴覚上の玄関や廊下などが配された今作は、ダニエル・ロパティンの評価を決定づけた高い実験性、それでいて幅広いリスナーに受け入れられるという秀でたバランス能力が、見事なまでに発揮されている。また、これまで以上に伝統的な音楽形式に挑戦しているという意味で、過去作品から大きな飛躍を果たしたと言えるだろう。一つ一つの抽象的なパーツがパズルのように組み合わさることで浮かび上がる劇的な情景が、いつの間にか聴く者を引き込んでいく。ここに広がる音楽は、自らの選択によって作る冒険のようなものであり、その裏に潜む、複雑に組み立てられながらも全くもって自由奔放なプロセスを映し出している。

Artist : ONEOHTRIX POINT NEVER (ワンオートリックス・ポイント・ネヴァー)
Title : R Plus Seven (アール・プラス・セブン)
Release Date : 2013.9.21 (Sat)
Cat No : BRC-394
Price : ¥2,200 (Tax incl)
Label : Warp Records / Beat Records

NIGHTMARES ON WAX のオフィシャル HP はこちら↓
Official HP ⇨ <http://www.pointnever.com/>
facebook ⇨ <http://www.facebook.com/oneohtrix>
Twitter ⇨ @OPN
soundcloud ⇨ <https://soundcloud.com/oneohtrix-point-never>
Beatink HP ⇨ <http://http://www.beatink.com/Labels/Beat-Records/Oneohtrix-Point-Never/BRC-394/>

Track Listings

1. Boring Angel
2. Americans
3. He She
4. Inside World
5. Zebra
6. Along
7. Problem Areas
8. Cryo
9. Still Life
10. Chrome Country
11. Gone (Bonus Track For Japan)

